

思いや意図をもって表現する力を高める小学校音楽科指導の工夫

— 楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動を通して —

熊野町立熊野第三小学校 中村 亜沙子

研究の要約

本研究は、思いや意図をもって表現する力を高める指導の工夫について考察したものである。文献研究から、思いや意図をもって表現する力を高めるためには、児童が主体的に音楽活動に関わる中で音楽を形づくっている要素を感じ取ること、友達との関わりの中で表現活動を行っていくことが重要であることが分かった。そこで、音楽を形づくっている要素を感じ取るために「楽譜探検シート」を開発し、音楽を形づくっている要素を感じ取ったり、友達とともに表現の工夫を考えたりする学習活動を進めた。その結果、児童は、音楽を形づくっている要素を基に、表現に対する考え方や願い、意図をもって表現の工夫を行い、思いや意図をもって表現する力を高めることができた。以上のことから、楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動は、思いや意図をもって表現する力を高めることに有効であることが明らかになった。

キーワード：楽譜 楽譜探検シート 音楽を形づくっている要素

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成20年）音楽（以下、「指導要領」とする。）の第5学年及び第6学年の目標（2）には、「基礎的な表現の能力を高め、音楽表現の喜びを味わうようにする。」¹⁾、内容「A表現」の（2）イには、「曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること。」²⁾と示されている。小学校学習指導要領解説音楽編（平成20年、以下「解説」とする。）では、「基礎的な表現の能力」とは、「視唱、視奏の能力や楽譜についての理解、音楽を形づくっている要素に対する感受性と、それに支えられた表現の技能など」³⁾と述べられている。また、「思いや意図をもって演奏する」とは、「表現に対する自分の明確な考え方や願い、意図をもって演奏する」⁴⁾ことと述べられている。

国立教育政策研究所における特定の課題に関する調査（小学校音楽）調査結果（平成22年）では、楽譜に示された記号の正しい名称の組み合わせを選択する問題の通過率は59.4%と低い。また、リズムをつくり、その工夫について記述する問題では、リズムと工夫の記述とが整合しない児童が35.0%おり、自分の意図を明確にして表現することに課題が見られる。これらのことから、音楽を形づくっている要素の働きが生み出す音楽の表情などを、記号や用語と関わらせながら感じ取り、感じ取った要素の働き

を意識しながら、思いや意図をもって音楽活動を行うための指導の工夫が求められていると考える。

一方で、先行研究における成果として、楽譜を用いて音楽を視覚化したり楽曲を分析したりすることが、表現の工夫につながると述べられている。

そこで、第5学年の器楽活動において、様々な場面で楽譜を用いる。具体的には、見えない音楽を視覚化させ、音楽を形づくっている要素を感じ取らせる。また、楽譜を手掛かりにして、友達とともにより豊かな表現の工夫を考えさせる。これらの活動を通して、思いや意図をもって表現する力が高まると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 思いや意図をもって表現する力について

(1) 思いや意図とは

「解説」には、思いや意図をもって演奏することについて、「児童が自ら考え、試行錯誤し、主体的に器楽の活動に取り組んで欲しいという願いを込めている。」⁵⁾と述べられている。また、伊野義博（平成22年）は、音楽を形づくっている要素や構造の働きに対する気付きが、感受を深めるとともに、強い思いや創意工夫の欲求を生むとしている。

これらのことから、思いや意図とは、児童が主体

的に音や音楽に関わる中で感じ取った音楽を形づくっている要素やその働きを根拠とした、明確な考え方や願い、意図とする。

(2) 表現する力とは

小島律子（1998）は「音楽による表現の教育」の中で、表現について「外的なものの働きかけによって生じた自分の『内なるもの』を、素材を通して自分の身体の外に表すことである。」⁶⁾と定義しており、「『内なるもの』とは、経験、観察、記憶、イメージ、思考、情動、感覚、感情などが絡み合って起こすこころの動き」⁷⁾と述べている。堀内久美雄（2011）は、「表現とは、児童が自分の内なる音に耳を傾け、それを実際の音楽にする活動のこと」⁸⁾と述べている。

また、長野純子（2008）は、「表現の過程は、人との関わりの中で進んでいく。すなわち、表現活動における音楽的思考の過程において、子ども同士、子どもと指導者との間でイメージのやり取りがなされる。それによって、それまで曖昧だったものが明確になったり、また、無意識のうちに表出されていたことが意識化されたりして、表現として成立するための課題が徐々に焦点化されていくと考えられる。コミュニケーションを通して内容が把握・整理されることで、単なる表出ではなく表現として成り立つのである。」⁹⁾と述べている。

以上のことから、表現する力とは、外的なものの働きかけによって生じた自分の「内なるもの」を、人との関わりの中で整理・形成し、実際の音楽に表す力とする。

(3) 思いや意図をもって表現する力とは

本研究において、思いや意図をもって表現する力とは、(1) (2) から、感じ取った音楽を形づくっている要素を基に生まれたイメージを、友達との関わりの中で整理・形成し、明確な考え方や願い、意図をもって音楽に表す力とする。

2 楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動

(1) 楽譜を用いることについて

「指導要領」では、第3学年以上において、楽譜を見て歌ったり演奏したりすることが内容の一つに定められており、第5学年及び第6学年の内容「A表現」(2)アには、「範奏を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏すること。」¹⁰⁾と示されている。

先行研究によると、吉田真未（2008）は、「楽譜

によって見えない音楽を「視覚化」したことにより、生徒がリズムを認識しやすくなったことや、旋律から全体のイメージを捉えることができたことを挙げ、音楽活動の可能性が広がることこそが『読譜指導』の意義であるとしている。この視覚化について、野本由紀夫（平成21年）は、楽譜を、「歌わせる」ためにではなく音楽を「見せる」ために使うことで、音楽が「聴こえてくる」としている。

伊藤雅美（平成25年）は、拡大楽譜に各自の表現アイディアを書いた付箋を貼っていき、最も効果的な表現を探っていく実践を行っており、児童は仲間と音楽のよさを共有し、互いに学び高め合いながら、音楽表現の思いや意図を高めていったとしている。共有することについて、津田正之（平成25年）は、「自分たちの考えを仲間と伝え合うことによって、音楽表現の思いや意図とともに、音楽表現そのものも深まることを示唆している。」¹¹⁾と述べている。

これらのことから、楽譜を用いることは、楽曲の演奏に利用するだけではなく、視覚的に楽曲の構造を理解し、音楽を形づくっている要素を感じ取りやすくすること、お互いの考えを共有し、表現の可能性を広げることにも効果的であることが分かる。

そこで、本研究では、「視覚化」「共有化」の二つに視点をおき、楽譜を手掛かりとしながら音楽活動を行っていくこととする。

(2) 音楽を形づくっている要素について

「指導要領」の〔共通事項〕(1)アに示されている音楽を形づくっている要素を、表1に表す。

表1 音楽を形づくっている要素

音楽を特徴付けている要素	低学年	音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなど
	中学年	低学年で示したものに加え、音の重なり、音階や調など
	高学年	中学年までに示したものに加え、和声の響きなど
音楽の仕組み	低学年	反復、問い合わせなど
	中学年	低学年で示したものに加え、変化など
	高学年	中学年までに示したものに加え、音楽の縦と横の関係など

「解説」では、「『音楽を形づくっている要素』とは、『音楽を特徴付けている要素』及び『音楽の仕組み』に加え、歌詞、歌い方や楽器の演奏の仕方、

演奏形態など、音楽というものを形づくっている要素を含むものである。」¹²⁾と述べられている。

これらの要素は、「指導要領」〔共通事項〕（1）において、「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、指導することが示されている。

（3）音楽を形づくっている要素を感じ取ることについて

高須一（2012）は、すべての音楽に共通して存在し、音を音楽にしている共通のものが音楽を形づくっている要素だとし、「音楽というものは一曲一曲が固有な味わいを持っており、（中略）一曲一曲の固有な味わいを深く楽しむためには、その一曲一曲を音楽にしている共通のものを学ぶ必要があります。共通性を理解することによって、一曲一曲の違いを感じ取れるようになります。」¹³⁾と述べている。

清田和泉（2008）は、「音楽に触れたとき、児童生徒はまず体で音楽を感じる。そして漠然と感じ取った音楽の雰囲気を、音楽の諸要素への知覚・感受を通して、より具体的な曲想の感じ取りへと発展させていく。曲想の感じ取り方が深まることで、曲への思いやイメージが広がり、質の高い表現活動や鑑賞活動が行われるようになり、表現の技能や鑑賞の能力も高まっていく。」¹⁴⁾と述べている。曲想について、中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年）には、「曲想は、音楽を形づくっている要素や構造の働きによって生み出されるものであるから、それらをとらえることによって、曲想をより深く味わうことが可能となる。」¹⁵⁾と述べられている。

以上のことから、音楽を形づくっている要素を感じ取ることが、曲想を捉え、音楽を全体的に味わう能力を高め、豊かな音楽活動を行っていくことにつながるといえる。

（4）楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動について

楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動を行っている先行研究から、本研究の進め方について考える。

向井さゆり（2013）は、歌唱の授業の中で、楽譜に表記されている強弱記号と繰り返される旋律や歌詞との関わり合いに着目させ、表現の工夫を行わせている。この実践の課題として、様々な要素に着目させすぎることが思考を混乱させる可能性があることや、音楽科の指導内容の系統性を明らかにし、カリキュラムを整理する必要性があることを挙げている。副島りさ（平成23年）は、歌唱・器楽・鑑賞の領域を関連付けた授業を行っている。そのうち、歌

唱・器楽の領域において、旋律の特徴を感じ取り、表現の工夫を考えさせる手立てとして、楽譜を基に話合いを行わせている。この実践の課題として、題材を通して感じ取らせたい音楽を形づくっている要素を、全ての児童に感じ取らせるための指導の工夫を挙げている。

これらの研究の共通する課題として、感じ取らせたい音楽を形づくっている要素を焦点化し、確実に習得させる指導の工夫が挙げられる。焦点化について、大熊信彦（平成23年）は、「一つの題材で取り扱う領域、分野、事項が多過ぎるために、いろいろな音楽活動が行われるだけの授業に陥ったり、取り扱う複数の教材曲について指導内容の視点からどのように関連しているのかが不明瞭なために、いろいろな教材曲を順番に扱うだけの授業に陥ったりすることのないように改善する必要がある。」¹⁶⁾と述べている。そこで、本研究では音楽を形づくっている要素の焦点化を図り、題材を通して扱うこととする。

なお、本研究で扱う音楽を形づくっている要素は「旋律」「強弱」「音楽の縦と横の関係」とする。

「旋律」について、高倉弘光（2012）は、〔共通事項〕にあるような音楽の仕組みがもっとも顕著に見えるのが「旋律」であり、音楽を分析的に見ようとするとき、旋律を注意深く見ることはとても有効な手段になるとしている。また、器楽の指導展開と〔共通事項〕との関連について、佐藤日呂志・坪能由紀子（2009）は、「音楽を形づくっている要素のかかわり合いや音楽の仕組みを聴き取って、自分たちの器楽表現に適用し、（中略）始まり方や終わり方の強弱や速さを考えて演奏する、強調したい声部と全体の音量バランスを考えて演奏する、などの工夫をすることなどが考えられる。」¹⁷⁾と述べている。

これらのことから、旋律が、その特徴を感じ取りやすい要素の一つであること、強弱が表現の工夫をする際に扱いやすい要素の一つであることがいえる。

「音楽の縦と横の関係」は、第5学年及び第6学年で扱う指導事項となっており、この要素の学習の上に中学校で学習する、音楽を形づくっている要素「テクスチュア」が成り立っている。音楽を、縦と横の関係から聴き取り感じ取ることは、音楽の全体像を捉え、曲想を生かした表現の工夫を行うにつながると考える。

3 楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動の具体について

本研究での学習展開を図1に示す。

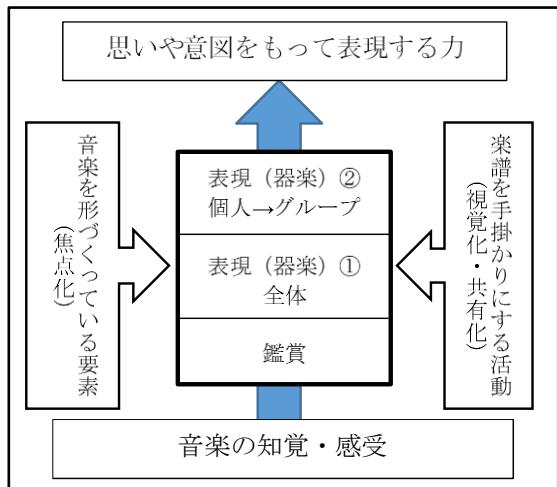


図1 本研究の学習展開

まず鑑賞の学習では、拡大楽譜を手掛かりにして、題材を貫く音楽を形づくっている要素を感じ取る。具体的には、旋律を口ずさんだり音楽を形づくっている要素を確かめたりしながら、教材を聴いて楽曲の構成を捉え、聴き取った音楽を形づくっている要素がどのような効果を生み出しているか、発表し合うことで共有する。

続く器楽活動では、楽譜探検シート（ひみつ編・工夫編・宝編）を順に用いて、発展的に学習を進める。表現（器楽）①の活動では全体で楽曲の分析や表現の工夫を行い、表現（器楽）②の活動では個人で楽曲の分析や表現の工夫を考えた後、それを基にグループで話し合い、表現の工夫を行っていく。同

じ学习過程が教材や学習形態を変えて繰り返されることで、音楽を形づくっている要素の習得が確かなものとなり、また、グループで共有化を図ることによって表現の幅が広がり、探求する活動への意欲が高まると考える。

楽曲の分析に用いる楽譜探検シート（ひみつ編）と学習活動の内容については、図2に示す。読譜の観点に沿って楽曲の分析を行うことで、児童の思考が整理され、楽曲の特徴が捉えやすくなる。そして、楽曲の分析をした楽譜探検シートを基に音楽を聴いたり演奏したりする活動を重ねることで、音楽が視覚化され、より深く音楽を味わえるようになることが期待できる。また、教師が児童の様子を見取り、的確な支援を行うことが可能となり、全ての児童に音楽を形づくっている要素を感じ取らせることにつながると考える。

楽譜探検シート（工夫編）は個人での表現の工夫に、楽譜探検シート（宝編）はグループでの表現の工夫に用いる。この二つのシートにも本時の教材となる楽譜が挿入されており、常に楽譜を手掛かりに活動を進めていくことができる。

III 研究の仮設及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動を取り入れれば、思いや意図をもって表現する力を高めることができるであろう。

<p><楽譜探検シート（ひみつ編）></p>	<p><楽譜探検シートを用いた学習活動の内容></p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 本時の教材。旋律線を引くなど、書き込みながら特徴を探す。 <input checked="" type="checkbox"/> 読譜の観点を10個示している。 <ul style="list-style-type: none"> ①曲名、作詞・作曲者名 ②ト音記号・ヘ音記号、調 ③拍子 ④速さ ($\text{J} = \text{ } \text{ } \text{ } \text{ }$) ⑤くり返し記号（曲の進み方） ⑥演奏形たい _____ ⑦せんりつの特ちょう ⑧他のパートとの関わり ⑨強弱記号 ⑩その他（スラー・スタッカートなど） <input checked="" type="checkbox"/> I [イ]に従って、気付いたことを記述する。 <input checked="" type="checkbox"/> U 旋律の特徴について記述する。 _____ <ul style="list-style-type: none"> (例) 2段目と4段目の旋律は同じ。 <input checked="" type="checkbox"/> E 他のパートとの関わりについて記述する。 <ul style="list-style-type: none"> (例) 下の旋律は上の旋律と重なっている。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 旋律・音楽の縦と横の関係に 関わりのある観点(⑥⑦⑧) </div>
------------------------------	---

図2 楽譜探検シート（ひみつ編）と学習活動の内容

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表2に示す。

表2 検証の視点と方法

視点	検証の視点	検証の方法
視点1	<ul style="list-style-type: none"> ○思いや意図をもって表現する力を高めることができたか。 ・感じ取った音楽を形づくっている要素を基に、思いや意図をもつことができたか。 ・友達との関わりを通して思いや意図をもつことができたか。 	楽譜探検シート 事前・事後アンケート 行動観察
視点2	<ul style="list-style-type: none"> ○楽譜を手掛けかりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動は、思いや意図をもって表現する力を高めることに有効であったか。 	楽譜探検シート 事前・事後アンケート 事前・事後テスト

(1) 事前・事後アンケート

読譜活動や表現の工夫に対する意識の変容を把握するため、4段階評定尺度法によるアンケートを行った。事後アンケートは、グループ学習を取り入れた活動の有効性に関する児童の意識を把握するための設問を加えた。

(2) 事前・事後テスト

楽譜についての理解や、楽譜から音楽を形づくっている要素を感じ取る力について授業前後でどのように変化したかを把握するため、事前・事後テストを行った。選曲については、本研究で扱う音楽を形づくっている要素「旋律」「強弱」「音楽の縦と横の関係」の全てについて感じ取ることができることに視点をおいた。事後テストでは、事前テストと類似の問題とした。図3に事前テストの一部を示す。

問題3 次の楽曲を見て、気付いたことを全て書きましょう。

冬げしき

例) ① 最初は、mfの強さから始まっている。

図3 事前テスト

IV 研究授業について

1 研究授業の内容と計画

- 期間 平成26年6月25日～平成26年7月8日
- 対象 所属校第5学年（1学級37人）
- 題材名 曲想を感じ取って演奏しよう
- 目標 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、曲想にふさわしい器楽表現の工夫をする。
- 指導計画（全6時間）

次	時	学習活動	楽譜との関わり
一	1	<ul style="list-style-type: none"> ○「ファーランドール」の楽曲の構造について知る。 ○強弱の効果について知る。 ○楽曲全体の曲想を味わって聴く。 ○紹介カードを書く。 	拡大楽譜
	2	○「エーデルワイス」をリコーダーで演奏する。	教材楽譜
	3	○「エーデルワイス」の楽曲の特徴を感じ取る。	楽譜探検シート(ひみつ編)
二	4	○「エーデルワイス」の曲想にふさわしい表現の工夫を考える。	楽譜探検シート(工夫編)
	5	○考えた工夫に気を付けて、「エーデルワイス」を演奏する。	楽譜探検シート(工夫編)
	6	<ul style="list-style-type: none"> ○「家路」をリコーダーで演奏する。 ○「家路」の楽曲の特徴を感じ取る。 ○各自で「家路」の曲想にふさわしい表現の工夫を考える。 ○グループで「家路」の表現の工夫について考える。 ○考えた表現の工夫に気を付けて、「家路」を演奏する。 	楽譜探検シート(宝編)

2 教材について

本研究で扱う教材は、次の三つの観点を基に選択した。使用した教材については、表3に示す。

- ① 旋律、音楽の縦と横の関係を捉えやすい。
- ② 強弱を捉えやすい。
- ③ 旋律の特徴から強弱表現の工夫が考えやすい。

表3 教材について

楽曲（作曲者）	楽曲の特徴	観点
ファーランドール (ビゼー)	二つの対照的な旋律で構成されており、旋律の重なり合った響きや面白さを感じ取りやすい。	① ②
エーデルワイス (ロジャーズ)	リコーダー二重奏曲。跳躍進行が旋律の特徴となっており、滑らかなイメージや音の重なりの美しさを感じ取りやすい。	① ③
家路 (ドボルザーク)	リコーダー二重奏曲。緩やかな上行と下行旋律が繰り返されている。	① ③

V 研究授業の分析と考察

1 思いや意図をもって表現する力が高まつたか

(1) 楽譜探検シートによる分析

第4・5時における児童の楽譜探検シート（工夫編）を分析した結果、曲想に合った表現の工夫を考えることができた児童は100%であった。また、考えた工夫と、その理由（感じたこと）が一致している児童は91.9%いた。考えた表現の工夫とその理由が一致している児童の記述を次に示す。

1段目と3段目の旋律が同じ所は、1段目はm pにし、3段目の所はm fにしました。その方が1段目の所は落ち着いていて、3段目の所は力強い感じがするからです。

一方で、8.1%の児童は、曲想と表現の工夫は一致しているが、理由については記述がなかった。児童は、感じ取った音楽を形づくっている要素を基に思いや意図をもつことができたといえるが、感じたことを言葉に表すことが課題と考える。

(2) 事前・事後アンケートによる分析

図4は、アンケートを基に授業前後の児童の意識の変容をグラフに表したものである。

どちらの項目でも肯定的に回答した児童が増加し、否定的な回答をした児童は、それぞれの項目において2.7%，0%へと減少した。児童は、思いや意図をもって演奏できしたことや、思いや意図をもって表現することの楽しさを実感できたといえる。

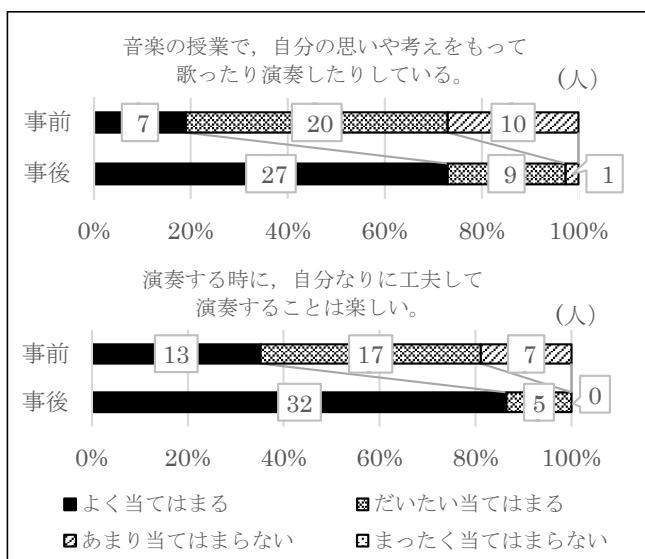


図4 事前・事後アンケートの結果

演奏の工夫について友達と話し合うことで、「このように演奏したい」という思いが強くなった。



図5 事後アンケートの結果

図5は、友達との関わりについて事後アンケートを行った結果で、97.3%の児童が肯定的に回答した。これは、グループ学習の場面で、楽譜を手掛かりに様々な思いや意図を共有し、表現の工夫を行った活動が、児童に、友達との関わりのよさを実感させることにつながったためと考えられる。

(3) 授業の様子より

第5時の、グループで表現の工夫について話し合う場面では、「最後の段につながる感じがするように、少しクレシェンドしよう。」などの発言があり、どのグループも、常に楽譜を手掛かりにし、音楽用語を用いながら表現の工夫について話し合う姿が見られた。また、授業の振り返りでは、「最初はまとまらなかつたけど、友達の工夫を付け加えたり減らしたりしてまとめていくと、よい演奏になった。」「みんなで話し合い、最初にそれぞれが考えていた工夫とは違う工夫になった。」などの発言があった。児童は、友達との関わりを通して、自らのイメージを整理・形成し、表現することができたと考える。

(1) (2) (3) から、児童は、思いや意図をもって表現する力が高まったといえる。

2 楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動は、思いや意図をもって表現する力を高めることに有効であったか

(1) 楽譜探検シートによる分析

次ページの図6に児童aが記入した楽譜探検シート（ひみつ編）の楽譜部分を、図7に児童bが記入した楽譜探検シート（工夫編）を示す。

児童aの楽譜探検シートを分析すると、同じ旋律がある所や、二段目の音の重なり、三段目の音の開きに気付くなど、児童aが、旋律の特徴と、音楽の縦と横の関係に着目して分析したことが分かる。

他の児童についても、第4時における児童の楽譜探検シート（ひみつ編、図2参照）を分析した

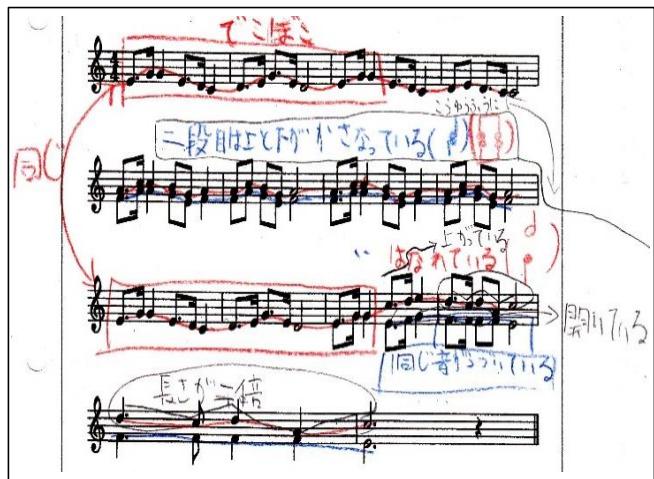


図6 児童aの楽譜探検シート（ひみつ編）

結果、「旋律」は100%、「音楽の縦と横の関係」は97.3%の児童が、感じ取ることができていた。児童は、示された読譜の観点に沿って、楽譜に書き込みながら楽曲を分析し、音楽を形づくっている要素を感じ取ることができたといえる。

また、図7に示した児童bの楽譜探検シートからは、旋律の音の高さから曲の盛り上がる部分を考え、強弱の工夫をしたことや、工夫をして演奏したことから曲想をさらに深く感じ取り、「だんだん強くしたらよかったです」などと、思いや意図をもてたことが分かる。



図7 児童bの楽譜探検シート（工夫編）

(2) 事前・事後アンケートによる分析

図8は、アンケートを基に、授業前後の児童の意識の変容をグラフに表したものである。

事前・事後アンケートを比較すると、事後アンケート

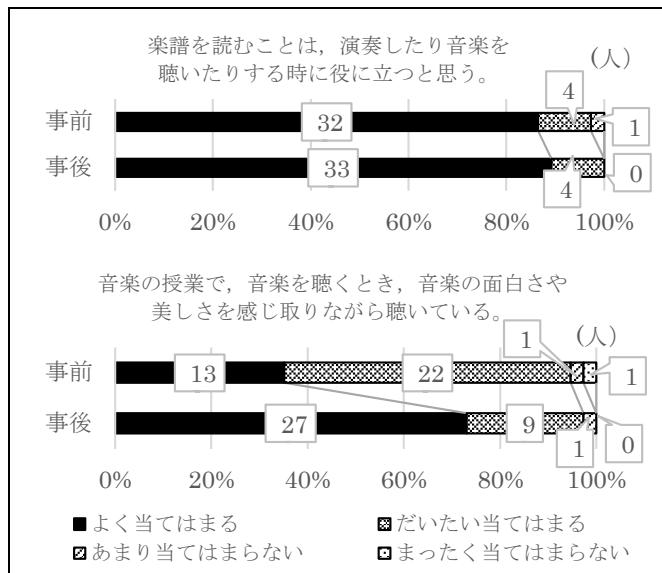


図8 事前・事後アンケートの結果

トでは、肯定的に回答した児童はどちらの項目でも増加している。また、楽譜は役に立つと思うか尋ねた一つ目の項目について、事前アンケートで否定的な回答をした児童一人は、楽譜が役に立たないと思う理由を、「楽譜がなくても、覚えたら演奏できる。」と記述していた。しかし、事後アンケートでは肯定的な回答に変化し、楽譜が役に立つと思う理由について、「楽譜を読めると色々なことが分かり、自分なりの工夫ができる。」と記述した。その他の児童についても、楽譜が役に立つと思う理由について、事前アンケートでは、「楽譜がないと演奏できない。」といった記述が多く見られたが、事後アンケートでは、「楽譜を読んで旋律から音楽を感じることができる。」「音楽が聴きやすくなつて、楽しくなる。」といった記述が見られた。楽譜を用いて音楽を視覚化させることができることで、音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動に有効であったといえる。

(3) 事前・事後テストによる分析

表4に事前・事後テストの判断基準、次ページ図9に事前・事後テストの結果を示す。

表4 事前・事後テストの判断基準

段階	基準
A	妥当性のある記述が、6～10個の観点で見られる。
B	妥当性のある記述が、3～5個の観点で見られる。
C	妥当性のある記述が、1～2個の観点で見られる。
D	未記入、もしくは、気付いたことについて記述があるが、妥当性に欠けている。

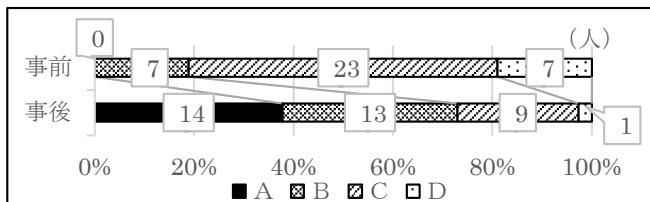


図9 事前・事後テストの結果

楽譜を見て気付いたことについて、妥当性のある記述が3個以上の観点で見られた児童は、事前テストでは18.9%であったが、事後テストでは、73%に増加した。児童の読譜の観点は、楽譜探検シートで示した読譜の観点10個と整合しており、児童が学習したことと基に音楽を形づくっている要素を感じ取ることができたと考える。

また、いずれの観点も気付きを記述した児童の数が増加している。図10に、本研究で扱った「旋律」「強弱」「音楽の縦と横の関係」に関わる気付きを記述した児童数の変化について、事前・事後テストを基に分析した結果を示す。

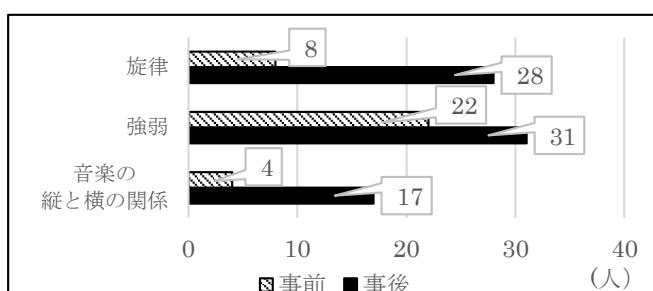


図10 旋律・強弱・音楽の縦と横の関係に関わる気付きを記述した児童数の変化

記述内容については、事前テストでは、「クレシンドが多い。」など、音楽を形づくっている要素に対する気付きしか述べていない記述が多く見られたが、事後テストでは、「さびの所はm fを使って強調している。」「なめらかで、落ち着く感じがしそう。」など、作曲者の意図を汲み取ろうとしている記述や、感受したことまで述べた記述が見られた。本研究で扱う音楽を形づくっている要素を焦点化したことにより、音楽を形づくっている要素を感じ取る力が高まったと考える。

(1) (2) (3) から、楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動は、思いや意図をもって表現する力を高めることに有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

- 楽譜探検シートを開発し、用いたことは、楽譜を手掛かりにする活動に有効であった。
- 楽譜を手掛かりに音楽を形づくっている要素を感じ取り、表現の工夫に生かす活動を取り入れることは、思いや意図をもって表現する力を高めることが有効であることが明らかとなった。

2 今後の課題

- 楽曲から感じたことを言葉に表すことが難しい児童もいた。言語活動の充実を図ることで、感じ取る力を高めていきたい。
- 本研究で扱わなかった音楽を形づくっている要素を取り入れた学習活動を、他の題材や学年でも実践し、発達段階に応じた系統性を明らかにしていく必要がある。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成20年a）：『小学校学習指導要領』文部科学省 p.79
- 2) 文部科学省（平成20年a）：前掲書 p.79
- 3) 文部科学省（平成20年b）：『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 p.51
- 4) 文部科学省（平成20年b）：前掲書 p.57
- 5) 文部科学省（平成20年b）：前掲書 p.57
- 6) 小島律子・澤田篤子（1998）：『音楽による表現の教育－継承から創造へ－』晃洋書房 p.2
- 7) 小島律子・澤田篤子（1998）：前掲書 p.3
- 8) 堀内久美雄（2011）：『最新 初等科音楽教育法〔改訂版〕』音楽之友社 p.10
- 9) 長野純子（2008）：『学校音楽教育研究 第12巻』日本学校音楽教育実践学会 p.60
- 10) 文部科学省（平成20年a）：前掲書 p.79
- 11) 津田正之（平成25年）：『初等教育資料 5月号』東洋館出版社 p.23
- 12) 文部科学省（平成20年b）：前掲書 p.18
- 13) 高須一 共著（2012）：『音楽づくりの授業アイディア集 音楽をつくる・音楽を聴く』音楽之友社 p.52
- 14) 清田和泉（2008）：『学校音楽教育研究 第12巻』日本学校音楽教育実践学会 p.48
- 15) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 p.14
- 16) 大熊信彦（平成23年）：『中等教育資料 4月号』ぎょうせい p.61
- 17) 佐藤日呂志・坪能由紀子（2009）：『小学校新学習指導要領の展開 音楽科編』明治図書出版 p.59